

### 早稲田大学

#### 平山郁夫記念ボランティアセンター (WAVOC)

#### 「社会貢献」と「体験的学習」をキーワードとした正課・課外の教育プログラム

和栗 百恵 (福岡女子大学)

#### ◆ 実施期間

2002年4月～現在

#### 1. 「グローバル人材」育成のための学内付属機関

早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター (WAVOC) は、「社会貢献」と「体験的学習」をキーワードとして掲げた「学内付属機関」である。本調査研究の事例の多くは、学部や大学院が主体となって実施している教育プログラムだが、WAVOC の事例は、「グローバル人材」(早稲田大学および WAVOC の言葉では「地球市民」) を育成するというミッションと機能を背負った学内付属機関が、全学(主に学部生だが、大学院生も含む。課外は18歳以上であれば誰でも参加可能)に対し、正課・課外の教育プログラムを提供しているものである。

#### ◆ 設立の背景とこれまでの歩み

早稲田大学が2001年に策定した「21世紀の教育研究グランドデザイン」は、21世紀の早稲田大学のあるべき姿について、三大教旨「学問の独立」「学問の活用」「模範国民の造就」を、時代背景をふまえ「独創的な先端研究への挑戦」「全学の生涯学習機関化」「地球市民の育成」と再設定した。早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター (WAVOC) の「教育的社会貢献活動」はこの「地球市民の育成」という3番目の教旨のもと展開されている。

「本学名誉博士である平山郁夫氏の国際的社会貢献活動とその精神を継承し、平山氏が推進してきた諸活動を更に推進・発展させるとともに、ボランティア活動を広く国内外で展開し、かつ、支援することによって、地域社会および国際社会へ貢献すること」(「早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター規則」第2条)というWAVOCの設置目的には、「ボランティア活動」が前面に押し出されている。しかし、ボランティアのマッチング機能に特化した大学ボランティアセンターが多い中、WAVOCは①科目(正課)、②プロジェクト(課外)、③その他プログラム、イベントの企画・運営を通じた様々な体験的学習の機会を充実させてきた(表1)。

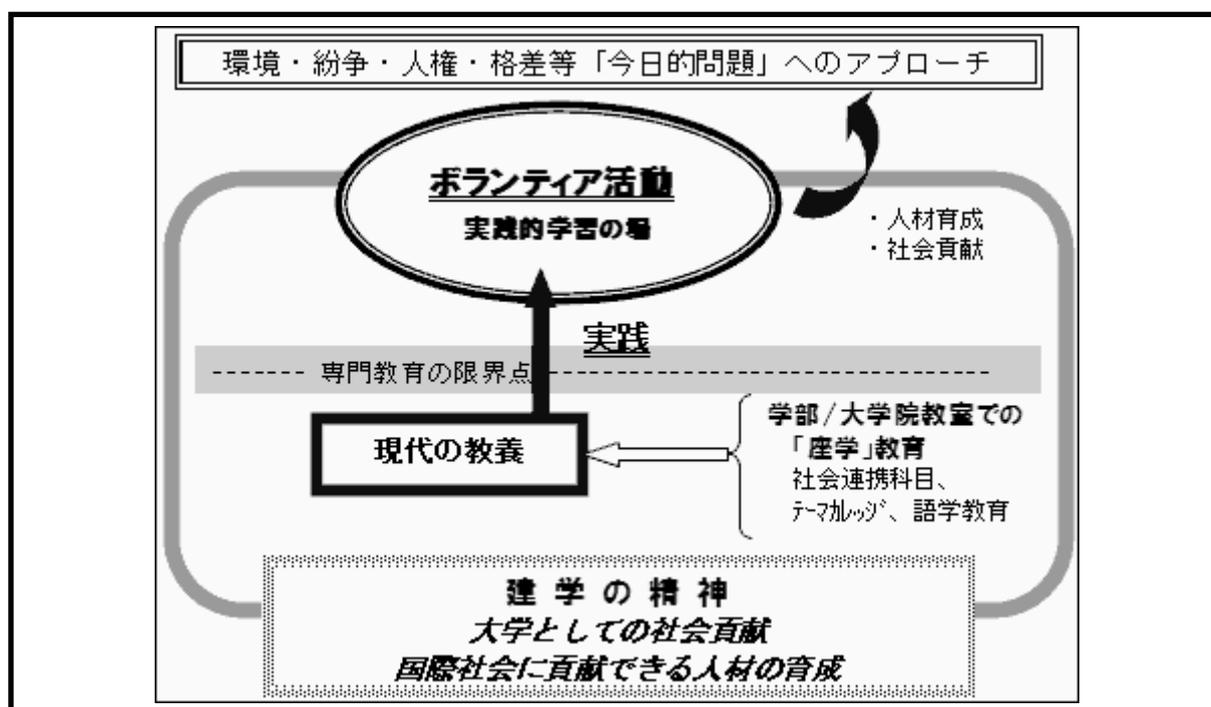
表 1：WAVOC の歩み

項目	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009
科目開講数	3	6	9	12	16	17	19	21
科目履修者数	250	275	420	1,064	1,900	1,882	2,138	2,000
課外（プロジェクト）数	10	17	24	28	34	34	36	34
プロジェクト参加者数**	629	5,790	6,566	12,328	12,746	13,813	17,545	未算出
メーリングリスト登録者数	455	1,519	2,488	2,692	3,544	4,083	5,033	6,500

\*科目＝全学部に開放されているオープン教育センター科目のこと。 \*\*参加者数は延べ人数

創設 4 年後の 2005 年には、「国境を越える教育的社会貢献活動の実践：行動する国際人の育成」というタイトルで特色 GP に採択された。WAVOC は「教育的社会貢献活動」を理論・知識と実践の融合によるものとし、その意義を「座学で得た理論・知識に現場での実地活動を加えることを通して、大半の学生は国内外の今日的課題の解決に直接的あるいは間接的に関わることになり、その過程で人間的な成長を遂げていく。その結果、ボランティアの受け手への社会貢献はもとより、活動に参加する主体である学生の自己成長を達成できる」（特色 GP 申請書類）と述べ、表 2 のような概念図を提示している。表に明らかなように、WAVOC の活動のコンセプトは、一方ではグローバル社会とそこにある大学教育の今日的課題、他方では建学の精神にしっかりと文脈化され、構造化されている。

表 2：WAVOC の教育的社会貢献活動



特色 GP 採択が、WAVOC の活動理念や戦略の明確化を促進したことに続き、2007～2008 年度、WAVOC は創設以来の教育実践を土台に、キーワードは「社会貢献」と「体験的学習」として、組織の理念を以下のように言語化した：

- ・ WAVOC は、社会と大学をつなぎます

- ・ WAVOC は、体験的に学ぶ機会を広く提供します
- ・ WAVOC は、学生が社会に貢献することを応援します

また、その理念の下、「基本姿勢」として、以下の4点を挙げている：

- ・ WAVOC は、世代、職業、国籍などを越えた多様な人々との協働を支えます
- ・ WAVOC は、「現場体験の知」と「学術的な知」をつなげます
- ・ WAVOC は、社会問題に気づき、考え、行動することを促します
- ・ WAVOC は、教職員が有機的に連携し、学生の主体性を引き出します

この言語化をきっかけとして、「WAVOC」としての組織アイデンティティの明示化・ブランディングの強化、その教育手法の体系化を進めている。

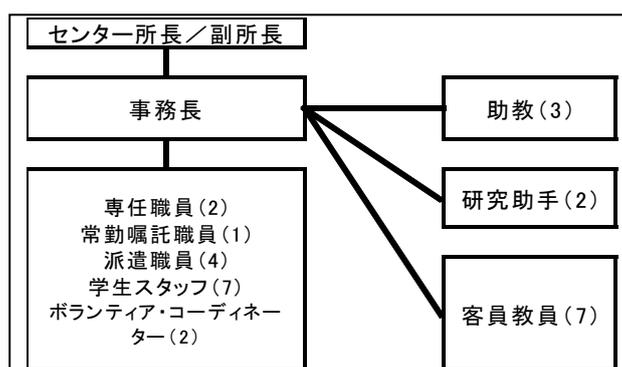
### 3. WAVOC運営体制

#### ◆ 教職協働

WAVOC は表3のような組織形態をとり、日常業務においてすべての教員・職員を統括するのが事務長となっている。

WAVOC では、その活動を支えるために、大学教育において伝統的な「教員」「職員」役割を超えた教職協働が必要という認識が共有されている。科目は教員が担当するものの、履修者への支援や実習科目の現地同行等、科目運営には職員の力が欠かせない。また、課外プロジェクトは、学生が主体的に取り組む一方で、教員はもちろん職員がそれをサポートする体制となっている。WAVOC 事務所では、個々人の業務の範囲を超えた学生への声掛けや助言などが行われている。

表3：WAVOC の組織形態（2009年2月現在）



#### ◆ 人的配置

WAVOC がその活動を展開していくためには、学外組織や地域コミュニティの協力が必要となる。特徴的なのは、「ボランティア」という言葉が表わす通り、学生・コミュニティの協働・協創のプロセスから学生が成長し、コミュニティが活性化する関係性の中では、「自発性」が重要視されることである。その調整役として、ある組織や地域と継続的に信頼関係を築いてきた教員を採用している。WAVOC 専任教員人事の際には、活動分野や活動サイト、およびそれらと連携しながら展開したい授業や課外プロジェクトについての案を応募者に問うている。職員については、

例えば現在の事務長（2代目）の場合は、自身が学生時代にボランティア活動に従事し、また、他箇所所属であった際にも WAVOC を兼任していた。専任職員1名と常勤嘱託職員は早稲田大学卒業生であり、学生時代は WAVOC の活動にかかわっていた。

同時に、センター日常業務における総務や経理作業を担う教職員もいる。それら管理・間接業務には、専任職員も携わるが、主に常勤嘱託および派遣職員が担う。「学生スタッフ」は、様々な業務のアシスタント的存在で、アルバイト雇用されている。「ボランティア・コーディネーター」は、有給スタッフで、間接業務ではなく、特定のボランティアプロジェクトを担当する。

- ・ 教職員の職位、役職・任期

WAVOC の所長は、①早稲田大学の総長、あるいは、②総長指名の早稲田大学教職員、のいずれかから大学が嘱任し、任期は2年（再任あり）。副所長については、所長の推薦に基づいて大学が嘱任し、所長の任期と同じ。WAVOC の事務長および専任職員は早稲田大学の職員であり、3～5年前後で別箇所に異動する。他の職員は全て任期付きであり、おのおの外部資金の期限や派遣法の適用等により、継続雇用年数の上限がある。教員に関しては、WAVOC の助教および研究助手は全て任期付きポストである（助教は2年、以後1年更新が4回まで、研究助手は外部資金による雇用のため、その財源が続くまで）。客員教員は任期1年間で更新に制限はなく、非常勤である。選択必修化が具体的に進めば（最終項「今後の計画」参照）、任期無し専属教員雇用の必要性についての議論がされる可能性がある。

- ・ WAVOC 教員の役割

WAVOC の専任教員の職位は、設立から2007年まで、1年ごとの更新3年上限の任期付き「客員講師（インストラクター）」であった。2008年にはそれにかわって「助教」身分が導入された。これは、給与・待遇面での改善、単独で科目を担当できるようになること、研究面の取組が制限されないようになること等の理由によるものだった。ただし、助教の身分になると一定の担当コマ数が課され、授業とはみなされない「プロジェクト（課外）」（次項参照）やその他教育業務についてはコマ数として換算できない。WAVOC が掲げるミッションのもと、WAVOC 教員に求められる業務内容について今後議論していく必要がある。

#### 4. WAVOCの「体験的な学習」

上述の通り、WAVOC は①科目、②プロジェクト（課外）、③その他プログラム、イベントの企画・運営を通じた様々な体験的学習の機会を提供している。表4～6に①～③をリストする。

WAVOC は、それら機会を通じて育成する能力（コンピテンシー）を2007年に以下のようにまとめている：

- ・ 問題を社会の仕組みの中に位置づける力
- ・ 想像し、共感する力
- ・ 企画・立案／運営・発信する力
- ・ 自分の生き方を他者とのかかわりの中で紡ぎ出す力

(WAVOC の活動方針)

## ◆ 「正課」の活動（「オープン教育」科目）

WAVOC が開講する科目は、全て、「オープン教育センター（OEC）」を通じて学生に提供される。これは WAVOC が独自で単位付与の権限を持たないことによる。OEC は、早稲田大学の全学基盤教育および全学共通の副専攻制度「テーマスタディ」を開講するセンターで、学部・学年・専攻分野にかかわらず履修可能な約 3000 科目＝「オープン科目」を提供している。

WAVOC が OEC を通じて提供する科目のうち、「講義科目」は座学、「体験的学習科目」は座学と現場体験によって構成される。体験的学習科目では、事前学習・現場体験・事後学習が構造化され、現場体験部分は教員が引率する。また、それぞれの科目に関して、上記 4 つの力のうち、どの力を育成するかが授業デザインに反映されている。

現場での活動は科目によって様々だが、①訪問、②ワーク（労働、作業）、③現地住民・当事者との対話、④実務者との対話、そして⑤履修生と教員によるふりかえり（リフレクション、内省）などからなる。現場の活動は、科目の学習目標によってデザインされる。単位は、それぞれの科目が課す課題や授業・現場体験への参加によって、半期科目、夏季集中科目ともに 2 単位が付与される。現場体験に充てられるのは約 10 日である。

新規科目は、WAVOC 運営委員会、続いて管理委員会を経て、オープン教育センター管理委員会にかけられる。WAVOC 教員採用人事の際に、採用応募書類にて新規科目案提出を求めており、採用されればその案をもとに新規科目立ち上げにつなげていく。

2010 年度開講予定の体験的学習科目 9 科目のうち海外渡航を伴う 5 科目については、志望動機作文と面接を課し、意識の高い学生を集められるように工夫している。

表 4：2009 年度 WAVOC 提供科目（全学共通＝オープン教育科目）

### 【講義科目】（全て半期）

	科目名	担当教員
1	ボランティア論：入門と基礎理論	助教 3 名
2	ボランティア論：体験の言語化	助教 3 名
3	環境とボランティア	助教 1 名
4	グローバルヘルス	助教 1 名
5	国際開発援助：理論と実践	助教 2 名、客員 2 名、学内教員 1 名
6	自己表現論	学内他箇所教員（非常勤）1 名
7	国際交流と社会貢献	学内他箇所教員（非常勤）1 名
8	コミュニティ論：入門と基礎理論	助教 1 名、学内他箇所教員 1 名

### 【体験的学習科目（講義+現場体験）】

	科目名	担当教員
9	持続可能な生活スタイル論（夏季集中）	学内他箇所教員 1 名、客員 1 名
10	Field Study on Peace Building（夏季集中）	学内他箇所教員 2 名、客員 1 名
11	ワークキャンプ論：実践的リーダー養成講座（半期）	助教 1 名
12	ワークキャンプ論：実体験の言語化（半期）	助教 1 名
13	人権と市民活動・ボランティア（半期&夏季）	助教 1 名
14	カンボジアの文化遺産の保全と：村づくりへの国際協力実習（夏季集中）	学内他箇所教員 1 名
15	持続可能な社会と市民の役割（半期）	客員 1 名、助教 1 名
16	東南アジアの開発問題と NGO の役割（冬季集中）	学内他箇所教員 1 名
17	コミュニティ論：展開と実践（後期）	助教 1 名、学内他箇所教員 3 名

【寄附講座】

科目名		担当教員
農林中央金庫・農林中金総合研究所	18	日中農業比較研究（半期） 学内他箇所教員1名、協定校（北京大学）教員1名
	19	農山村体験実習（通年） 学内他箇所教員4名
	20	食と経済（半期） 学内他箇所教員1名、学内他箇所教員（非常勤）3名
21	日本サムスン株式会社 シルクロード文化財保護	学内他箇所教員7名

◆ 「課外」の活動（「プロジェクト」）

プロジェクトは、①学生が自ら企画し WAVOC に提案をするもの、②教員が専門性や現場とのかかわりから WAVOC に提案するもの、③企業・自治体等が WAVOC に提案するもの、3種類に分けられる。プロジェクト活動は、正課よりも学生の自発性によるところが大きい。「授業（正課、単位付与あり）でないゆえ」の創造性や意欲が顕著に見られるプロジェクトも多々ある。上記②のスタイルでプロジェクトを担当する WAVOC 助教は、プロジェクトにおける「能動的な働きかけ」について、以下のように述べている：

ボランティアは、相手や社会に対して働きかけることである。すなわち、相手のためによかれと頭の中で描いたものが、果たして現実にもどのように受け止められるのかを実践する場となる。これは、教室での知識伝授型の学びから生み出した自分の思考を、社会に対して試す場ともいえる。このような社会に対する「能動的」な働きかけは、ボランティアならではの特徴といえる。…「経験させてもらうこと」が主目的である「スタディツアー」では、このような能動性は生まれにくい。能動的な働きかけがあつてこそ、相手から返ってくるものがあり、そこにまた投げ返すことで「相互性」が生まれる。相互に価値観をぶつけ合うことによって、新しい価値が生まれるといえる。（岩井、2010、下線筆者）

この能動性と相互性は、手段でも、目的でもあるだろう。つまり、能動的な働きかけの試行によって、相手との相互性が育まれていき、相手との相互性が育まれる中で、能動的な働きかけができるようになる。これを繰り返すことによって、能動性や相互性への志向性が生まれ、能動的に、相互的にかかわりあっていくためのスキルや能力を向上させることができる。

プロジェクトは、大きくは、①随時メンバーを募集しているものと、②春休み・夏休みの重点活動機から事前学習・準備にかかる時間を逆算して募集をかけるものとに分かれる。海外渡航のあるプロジェクトの場合、渡航の時期（長期休暇中）を視野に、訪問する土地やその経済社会文化に関する学習会やメンバーとのミーティングなどの事前準備に要する時間を逆算し、募集をかけている。事後の活動については、報告書作成や報告会実施は多くのプロジェクトに共通するが、中には現地体験をふまえ、他大学のゼミで発表をしたり、高等学校へ出前授業に行くもの、などもみられる。単位付与はなくとも継続的に活動を展開するプロジェクトは、「サークル」や「〇〇研究会」のような、先輩・後輩の縦のつながりもできている。

新規プロジェクトは、提案書が WAVOC の運営委員会で諮られ、承認されれば公認プロジェクト

トとなる（現在、WAVOC ではこの提案・承認のプロセスを含めたプロジェクトのあり方について再検討を行っている）。

表 5：2009 年度 WAVOC 全 34 課外プロジェクト

	プロジェクトタイトル	主な活動地域
1	エココミュニティ・タンザニア	タンザニア
2	海外ボランティアリーダー養成プロジェクト(ボルネオ)	マレーシア
3	ケニア社会林業プロジェクト	ケニア
4	イグアス地域自然環境保全プロジェクト	アルゼンチン
5	高尾の森づくり	高尾
6	一学一山運動	国内各地
7	環境保全型森林ボランティア	岡山
8	所沢キャンパス湿地保全活動	埼玉
9	思惟の森育林	岩手
10	日本コリア未来プロジェクト	韓国、タイ
11	日越学生交流プロジェクト	ベトナム
12	千畝ブリッジングプロジェクト	リトアニア、岐阜、福井
13	離島交流プロジェクト	沖縄
14	天龍村山村留学プロジェクト	長野
15	難民交流プロジェクト	早稲田
16	まつだい早稲田じょんのび交流プロジェクト	新潟
17	ラオス学校建設教育支援	ラオス
18	チャータースクールへの教育支援	米国
19	日本語を母語としない年少者の日本語教育	早稲田
20	スポーツボランティアプロジェクト (EKIDEN for PEACE)	タンザニア、山梨
21	ダウン症児者・自閉症児者・親きょうだいのワクワクレスリング教室	早稲田
22	ハンセン病問題支援	中国
23	コミュニティ・エイズ・プロジェクト (CAP)	国内、フィリピン
24	DVほっとプロジェクト	国内、韓国
25	三芳村里山づくり・有機農業体験実習	千葉
26	農楽プロジェクト	早稲田
27	農と食と緑の学校	福井
28	WIN日産プロジェクト	東京、神奈川
29	アトム通貨	早稲田
30	早稲田レスキュー (災害救援ボランティア)	早稲田
31	音楽ボランティア	国内外
32	日本ルワンダ学生会議	ルワンダ
33	S.P.K.遺跡の保存と村づくり協力クラブ	カンボジア
34	Cafaire	早稲田

#### ◆ 授業、プロジェクト、その他プログラム・イベントの相互補完性

WAVOC は、「学術的な知識を獲得し、体験につなげる」とする科目と、「社会問題に対して行動する」ことを主眼としたプロジェクトの連動を掲げる（WAVOC 紹介パンフレット 2009）。この「連動」は制度化されたものではなく、あくまでもゆるやかなものである。

授業、プロジェクト以外に WAVOC が展開する教育プログラムを表 6 に示す。これらイベントは、授業やプロジェクトとの相互補完的な役割を果たしている。

特に、春・秋と年 2 回開催される「ボランティアフェア」は、プロジェクト参加学生にとっての活動の節目（新規メンバー勧誘、発表機会をきっかけとした活動ふりかえりなど）となっている。また、ボランティアフェアを、提供科目のひとつである「ボランティア論」にも関連付け、履修生が、WAVOC の正課科目・課外プロジェクトでボランティア体験をした他の学生たちの活

動を知る機会を提供している。

「海外渡航を安全に終えようセミナー」は、海外渡航を伴う全てのプロジェクトの危機管理担当学生に参加を義務付けている。同セミナーの特徴は、それぞれのプロジェクトのこれまでの危機管理に関する知見をお互いに共有しながら、教職員から必要な助言を得るというスタイルで実施されている。これにより、プロジェクトを主体的に運営するにあたっての、危機管理・安全対策への当事者意識や責任感の醸成を促している。教職員が一方向的に「諸注意をする」といった伝統的なやり方ではなく、プロジェクトに連なるひとつひとつのプロセスにおいて、「主体性」を支える当事者意識を最大限に引き出すようにしている。

表 6. その他プログラム・イベント

	プログラム・イベント	内容
1	ボランティアフェア（前期1回・後期1回）	学生たちが主体的に企画運営する、WAVOC 科目やプロジェクトの見本市のようなもの。プレゼンをしたり、ブースを設けたりすることで、それぞれの経験を言語化・共有、メンバー勧誘などにつなげる
2	環境ボランティア学校	環境をテーマに現場へ出向き、さまざま体験をする。敷居を低くして、参加しやすい形態（単発参加）を目指す。
3	公開講座・公開セミナー	様々なテーマで不定期に開催。
4	国際協力キャリアプランニングセミナー	1年に1度開催。国際協力分野のキャリアを目指す学生向けに、実務者を招いてセミナーを実施。
5	海外渡航を安全に終えようセミナー	危機管理・安全対策のためのワークショップ。学生たち自身が危機管理の情報・経験交流を行えるような仕組み。

## 5. カウンターパート組織・コミュニティとの連携・調整

科目やプロジェクトにより、活動地のカウンターパートとの連携・調整のあり方は多様である。多くの場合、教員が自身の専門分野および活動先を有しており連携・調整を図るが、歴史の長いプロジェクトに関しては学生自身で連携・調整を担えるようになってきている。

調整方法は主にメールや電話であるが、科目・プロジェクト立ち上げの際に、準備・安全確認のための実地調査をする。その渡航費はWAVOCが負担する（活動先は、多くの場合、教員の専門分野に関連したかわりがあるところだが、個人研究費では負担させない）。

WAVOCの活動には、協定や覚書を伴うような制度化がされにくいカウンターパートが多く関わっている。特に、国際機関、NGO・NPO、あるいは大学などを通すのではなく、現地コミュニティに直接入れてもらうような場合は、そもそも「協定」や「覚書」を交わす習慣がないような場合もある。また、学生やコミュニティ双方の自発性を尊重するような場合は、制度化自体が自発性をしぼるものとなりうるだろう。

とは言え、安全対策の充実の観点からは、各カウンターパートとの覚書の作成が必要であり、WAVOCでは現在、覚書を導入する方向性で準備を進めているところである。

表7に、科目・プロジェクトごとのカウンターパート組織・コミュニティを示す。「主な現地カウンターパート」と表記してあるのは、カウンターパート以外にも、例えば訪問先など複数の協力組織・コミュニティが存在することによる。

表7：カウンターパート一覧（2009年度）

活動国・活動地	PJ・科目名等	主な現地カウンターパート
タンザニア	エココミュニティ・タンザニア	SEDEREC（現地 NGO）
マレーシア	海外ボランティアリーダー養成プロジェクト（ボルネオ）	マレーシア・サバ大学
ケニア	ケニア林業プロジェクト	KEFERI（ケニア林業研究所）
フィリピン	コミュニティ・エイズ・プロジェクト（CAP）	フィリピン大学女性学研究センター
タンザニア	スポーツボランティアプロジェクト	UNHCR（国連高等弁務官事務所）
リトアニア	千畝ブリッジプロジェクト	Sugihara House（予定）
アメリカ	チャータースクールへの教育支援	The Volcano School of Arts and Science
ベトナム	日越学生交流計画	江渕 真也氏（現地支援者）
韓国	日本コリア未来プロジェクト	延世大学奉仕団
韓国	DVほっとプロジェクト	梨花女子大学
中国	ハンセン病問題支援	家-JIA（現地 NGO）
ラオス	ラオス学校建設教育支援	ラオス情報文化省
ルワンダ	日本ルワンダ学生会議	ルワンダ国立大学
カンボジア	S. P. K. 遺跡の保存と村づくり協カクラブ	JST(Joint Support Team for Angkor Preservation and Community Development)
アルゼンチン	イグアス地域自然環境保全プロジェクト	JICA 現地事務所、ミシオネス州環境省、日本アルゼンチン日系人団体連合会
ミクロネシア・ヤップ島、新潟	持続可能な社会と市民の役割	ヤップ州青少年市民省
カンボジア	カンボジアの文化遺産の保全と村づくりへの国際協力実習	JST(Joint Support Team for Angkor Preservation and Community Development)
ラオス、タイ	東南アジアの開発問題と NGO の役割	ラオス情報文化省
オーストラリア	持続可能な生活スタイル論	EcoLogical Solutions - Consultancy & Education Services; Crystal Waters Permaculture Village

## 6. 財源・予算

支出ベースで見ると、内部資金が 25%、外部資金（寄付講座、寄付金等）が 75%の割合で賄われている。寄付講座は 3 年前後のスパンで入れ替わり、寄付金は景気に左右されることから、持続可能な財源確保とは言えない。

## 7. 卒業生の就職先

WAVOC の科目履修生・プロジェクト参加生の総数は、年間数千名を超える。科目やプロジェクトを通して、あるいは学生スタッフとして事務所で働くことによって、教職員とも頻繁にやりとりがある学生については就職先が把握できているが、全ての学生の進路に関する追跡調査はされていない。

進路の把握がなされる機会としては、年1度の「卒業パーティー」が挙げられる。これは卒業式のタイミングで主に4年生が集まるものである。事前にプロジェクトの代表等を通じて案内メールを流し、実際にパーティーに参加した中から、昨年度は30名ほどが進路アンケートに回答している。

これまでの就職先は、「国際協力分野」に限られない。国際協力機構への就職者はいるが、傾向としては企業への就職が多い。

## 8. WAVOCの教育活動実施・継続に関する課題

「運営体制」の項でも述べたとおり、特に教員の任期が科目やプロジェクトの継続性の観点から、また、ノウハウの継承の観点から課題である。職員についても、WAVOC が展開するような体験的学習のスペシャリスト養成の観点から、3～5年という任期を再考できるだろう。

正課に関しては、現在、総長の掛け声のもと、「インターンシップ、体育、ボランティア関連科目群」の開設・選択必修の導入のために、WAVOC も2011年度に全ての科目を選択必修化すべく準備を進めている。実現には教職員増員&予算増の必要がある。

課外に関しては、現在高等教育改革文脈において「学生支援」と「学習支援」が重なり合う領域が拡大していることを追い風とするためにも、WAVOC の知見の整理と発信が早急な課題である。

## 9. 「国際協力分野におけるグローバル人材」の育成について

WAVOC の教育活動は、「国際協力分野」での人材育成に特化していない。「大学の外に触れて、色々な年代や立場の人に触れ、その人たちと共に活動をする＝『グローバル』な活動すること」によって、「社会に貢献する」「社会の要請に応える」人材を育成したい、と、WAVOC 職員は語る。そしてその人材育成については、「学生の主体性を引き出す」ことを基本姿勢に掲げ、その実践の知見を、普段のミーティングや研究会で蓄積し、シンポジウムなどで発信している。多くの学生が「知識の活かし方を知らない」、そして「自分の言葉で語れない」点について課題と感じており、現場でのかかわりおよびかかわり後の咀嚼を支援することで、知識を活かす・自らの言葉で語る能力の育成に努めている。

本調査報告にあたっては、WAVOC 教職員のみなさん、特に古閑敬浩職員に多大なるご協力をいただいた。ここに厚く御礼申し上げます。

#### ◇ 参考資料

- ・岩井雪乃（2009）「ボランティア体験で学生は何を学ぶのか：アフリカと自分をつなげる想像力」  
法政大学人間環境学部紀要（2010.3）
- ・WAVOC紹介パンフレット2009
- ・早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター規則